

# 小学生における体育授業への苦手意識に関する研究 —運動クラブ所属状況, 運動実施頻度および運動好感度に着目して—

上 家 卓<sup>1</sup>, 中 道 莉 央<sup>2</sup>, 石 澤 伸 弘<sup>2</sup>  
黒 河 あおい<sup>1</sup>, 神 林 勲<sup>2</sup>, 城 後 豊<sup>3</sup>

## Study of awareness that elementary school students are hard to deal with physical education classes: Focusing on belonging to sports clubs, exercise frequency and a good impression for exercise

Suguru Kamiie<sup>1</sup>, Rio Nakamichi<sup>2</sup>, Nobuhiro Ishizawa<sup>2</sup>,  
Aoi Kurokawa<sup>1</sup>, Isao Kambayashi<sup>2</sup>, Yutaka Jogo<sup>3</sup>

### Abstract

In our previous study (Kamiie et al., 2013), we have reported structuralization of awareness that elementary school students are hard to deal with physical education and development of its measurement scale. In this paper, we have investigated into effect of belonging to a sports clubs, exercise frequency and a good impression for exercise influence awareness that elementary school students are hard to deal with physical education. Elementary school [the 3rd grader boys (n=28) and girls (n=28), the 4th grader boys (n=30) and girls (n=39), the 5th grader boys (n=29) and girls (n=28), the 6th grader boys (n=30) and girls (n=36)] students participated in this study.

The results were as follows;

1)On difference belonging to a sports clubs, the not belonging groups showed a higher score than the belonging groups in awareness of escape, inferiority, revulsion. These results suggested that difference belonging to a sports clubs has influenced awareness that elementary school students are hard to deal with physical education. 2)On difference exercise frequency, the low exercise frequency groups showed a higher score than the high exercise frequency groups in awareness of escape, inferiority, revulsion. These results suggested that difference exercise frequency has influenced awareness that elementary school students are hard to deal with physical education. 3)On difference impression for exercise, the bad impression for exercise groups showed a higher score than the good impression for exercise groups in awareness of escape, inferiority, revulsion. These results suggested that difference impression for exercise has influenced awareness that elementary school students are hard to deal with physical education. So, the teachers should this result keep in mind and teach physical education.

**Key words** : escape, comparison, inferiority, revulsion

1. 北海道教育大学大学院教育学研究科  
〒002-8502 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1番5号
2. 北海道教育大学札幌校  
〒002-8502 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1番5号
3. 北海道教育大学理事  
〒002-8502 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1番5号

1. Graduate School of Education, Hokkaido University of Education  
Ainosato 5-jo 3-chome Kita-ku Sapporo 002-8502
2. Hokkaido University of Education Sapporo  
Ainosato 5-jo 3-chome Kita-ku Sapporo 002-8502
3. A trustee of Hokkaido University of Education  
Ainosato 5-jo 3-chome Kita-ku Sapporo 002-8502

著者連絡先 上家 卓  
sugurukamiie@gmail.com

緒 言

現行の学習指導要領（文部科学省，2008）やスポーツ基本法（文部科学省，2011）などでは，様々な場所で生涯に渡って運動に親しむこと，いわゆる「生涯スポーツ」の重要性が説かれている。小林（2008）によれば適度な運動は身体の発達だけでなく，精神の発達にも影響を与えることが示唆されている。また，集団で運動を行うことにより仲間意識を育み，良好な人間関係を構築するという点においても運動は大きな役割を担っている。

しかしながら，文部科学省による「子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申）」（文部科学省，2003）や「体力・運動能力調査」（文部科学省，2010；札幌市教育委員会，2010）などでは運動をする子どもとしない子どもの「二極化傾向」が示されている。また，子どもの運動実施頻度，運動クラブへの所属の有無，運動好感度といった運動状況と体力には相関関係があることも認められており（文部科学省，2010），子どもの運動機会の保障は生涯スポーツにおける非常に重要な課題であると考えられる。したがって，子どもに様々な運動機会を保障する学校体育は，生涯スポーツの実践に大きな影響を与える。特に小学校期は，スキヤモンの発達曲線からも明らかな様に神経系の発達が著しく，運動の基本となる調整力を身に付けるのに最も望ましい時期である。そのため小学校期においては，様々な運動を経験させ，多様な調整力の取得が望まれている（高田，1985a；宮下，2010）。また，日下ほか（2001）や立木ほか（2008）によると小学校期における体育学習は，生涯スポーツの観点からも重要な二つの側面を持っている。一つ目は中学，高校と続いていく人生の中で運動に親しむことのできる心身の基礎的な育成，二つ目は習得最適時期が小学校期である運動を多様に経験するといった，生涯スポーツの一ステージとしての小学校期の側面である。

この様な現状を受け，筆者らは先行研究（今林，1996；及川・小川，1999；深谷・吉野，1999；高橋，1999；並木，2008；加賀，1989；高田，1985b；伊東・波多野，1982；海野，2002）を基に，体育授業への苦手意識の構造化および測定尺度の作成に着手した（上家ほか，2013）。その結果，体育授業への苦手意識は「回避感情」，「比較感情」，「劣等感感情」および「嫌悪感情」からなる4因子構造であることが明らかになり，それを踏まえ14の質問項目からなる「体育授業への苦手意識測定尺度」を作成した。また，性別や学年推移が体育授業への苦手意識に影響を及ぼしているという知見も得た。

ところで，「体力・運動能力調査」（文部科学省，2010；札幌市教育委員会，2010）や松尾ほか（2009）の研究によると運動クラブ所属状況，運動実施頻度および運動好感度といった運動に直接関わる要素は体力と深い関係があることが明らかにされている。また，藤田（2009）の研究では運動への関心が高い児童ほど体育活動中の努

力の継続が認められていることから，これらの要素が体育授業への苦手意識に何らかの影響を及ぼしている可能性が示唆される。我々の研究（上家ほか，2013）は児童の性別，生年月日，学年といった属性に着目し調査分析を行ったものだった。そこで，本研究では運動クラブ所属状況，運動実施頻度および運動好感度に着目した。この様なことより，本研究では運動クラブ所属状況，運動実施頻度および運動好感度が体育授業への苦手意識に及ぼす影響を調査し，体育授業への苦手意識の改善方法と体育授業への苦手意識を持ちやすい子どもに対しての指導内容を検討することを目的とした。

方 法

1. 調査対象および調査期間

札幌市内のN小学校の3年生から6年生の男女305名に質問紙を配布した。質問紙回収後，回答が全て一方の極にあるなどの極端に得点の偏った回答，欠損回答を除外した結果，調査対象者は248名になった。対象者の学年ごとの人数を表1に示す。調査は2011年11月21日から12月14日の間に行った。

2. 調査内容

本研究では，質問紙による自記式無記名の調査を実施した。調査内容は以下の4点である。

(1) 体育授業への苦手意識

先行研究（上家ほか，2013）において筆者らが作成した「体育授業への苦手意識測定尺度」を用いた。本尺度

表1 対象者の性別および学年の内訳

	3年生	4年生	5年生	6年生	男女総計
男子(名)	28	30	29	30	117
女子(名)	28	39	28	36	131
合計(名)	56	69	57	66	248

表2 質問紙の質問項目および下位尺度の名称

因子	感情	項目
第1因子	回避感情	6. 途中であきらめたくなる。
		7. そこから逃げたくなる。
		11. 頑張っても無駄だと思う。
		12. できればやりたくないと思う。
第2因子	比較感情	2. 友達の様子が気になる。
		13. 友達と比べたくなる。
		14. 上手な子が気になる。
第3因子	劣等感感情	5. 失敗が怖くなる。
		8. 失敗を思い出す。
		9. 恥ずかしくなる。
		10. 悔しくなる。
第4因子	嫌悪感情	1. 自分が嫌になる。
		3. 嫌な気持ちになる。
		4. やる気が出なくなる。

は14の質問項目で構成されており(表2), 体育に取り組むことをできるだけ避けたいと感じる事柄で構成されている「回避感情」, 体育に取り組む際に他者の様子が気になったり比較したりしたくなるという感情からなる「比較感情」, 体育に取り組む際に劣等感を感じる項目で構成されている「劣等感情」, 体育に取り組むにあたり嫌悪感を感じる項目で構成されている「嫌悪感情」という4つの下位尺度からなる4因子構造である。各項目の選択肢には5件法を用い, 「当てはまる: 5点」, 「ややあてはまる: 4点」, 「どちらともいえない: 3点」, 「ややあてはまらない: 2点」および「あてはまらない: 1点」を与えて得点化しており, 各下位尺度は「回避感情」が20点満点, 「比較感情」が15点満点, 「劣等感情」が20点満点および「嫌悪感情」が15点満点となっている。そして, 4因子の合計を「体育授業への苦手意識」とし, 70点満点で評価した。

### (2) 運動クラブ所属状況について

「体力・運動能力調査」(文部科学省, 2010; 札幌市教育委員会, 2010)の質問項目である「運動部やスポーツクラブへの所属状況」を基に, 調査対象を運動クラブ無所属群(以下, 「無所属群」とする), 運動クラブ所属群(以下, 「所属群」とする)の2群に分類した。

### (3) 運動実施頻度について

「体力・運動能力調査」(文部科学省, 2010; 札幌市教育委員会, 2010)の質問項目である「運動やスポーツの実施状況(学校の体育を除く)」を基に, 調査対象を「ほとんどしない」「ときたま(月に1~3日ぐらい)」を運動実施頻度低群, 「時々(週に1~3日ぐらい)」「毎日(週に3日以上)」を運動実施頻度高群と分類した。

### (4) 運動好感度について

「体力・運動能力調査」(文部科学省, 2010; 札幌市教育委員会, 2010)の質問項目である「運動やスポーツの好き・きらい」を基に, 調査対象を「きらい」「ややきらい」を運動好感度低群, 「やや好き」「好き」を運動好感度高群と分類した。

## 3. 分析方法

運動クラブ所属状況, 運動実施頻度, 運動好感度および体育授業への苦手意識については以下の通り分析を行った。

### (1) 3つの要素(運動クラブ所属状況, 運動実施頻度および運動好感度)の関係性

運動クラブ所属状況, 運動実施頻度, 運動好感度それぞれの他の要素における割合を検討した。

### (2) 体育授業への苦手意識と運動クラブ所属状況の関係について

全体, 男子, 女子, 3年生, 4年生, 5年生および6年生における無所属群, 所属群の体育授業への苦手意識およびその下位尺度の値に有意な差が認められるか検討した。

### (3) 体育授業への苦手意識と運動実施頻度の関係について

男子, 女子, 3年生, 4年生, 5年生および6年生という分類では各群のn数に大きな隔たりが生じ, 統計処理に影響を及ぼすと推察された。そのため, 調査対象を小学校学習指導要領(文部科学省, 2008)の学年区分より, 3年生および4年生を中学年, 5年生および6年生を高学年と分類した。そして, 全体, 中学年および高学年における運動実施頻度低群, 運動実施頻度高群の体育授業への苦手意識およびその下位尺度の値に有意な差が認められるかを検討した。

### (4) 体育授業への苦手意識と運動好感度の関係について

男子, 女子, 3年生, 4年生, 5年生および6年生という分類では各群のn数に大きな隔たりが生じ, 統計処理に影響を及ぼすと推察された。そのため, 全体における運動好感度低群, 運動好感度高群の体育授業への苦手意識およびその下位尺度の値に有意な差が認められるかを検討した。

## 4. 統計処理

質問紙の結果は, EXCEL2007 for Windows (Microsoft社製)を用いてまとめた。また, 質問紙の分析については, 多変量解析ソフトの「Stat View Version5.0」(ヒューリンクス社製)を用いた。2群間の平均値の差の検定は対応のないt検定を行った。なお, 有意水準は5%未満とした。

## 結 果

### 1. 3要素(運動クラブ所属状況, 運動実施頻度および運動好感度)の関係性について

本研究で苦手意識に影響を与える要素として考えた3つの要素, 運動クラブ所属状況, 運動実施頻度および運動好感度について検討した。図1は他の要素における運動クラブ所属状況の割合を表したものである。運動実施

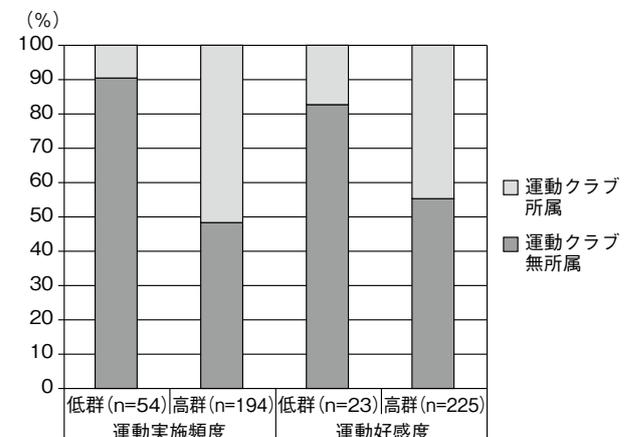


図1 他要素における運動クラブ所属状況の割合  
図は運動実施頻度, 運動好感度における運動クラブ所属状況の割合を百分率で表わしたものである。

頻度低群においては90.7%が無所属群であり、9.3%が所属群であった。運動実施頻度高群においては47.9%が無所属群であり、52.1%が所属群であった。運動好感度低群においては82.6%が無所属群であり、17.4%が所属群であった。運動好感度高群においては54.7%が無所属群であり、45.3%が所属群であった。

図2は他の要素における運動実施頻度の割合を表したものである。無所属群においては65.5%が運動実施頻度高群であり、34.5%が運動実施頻度低群であった。所属群においては95.3%が運動実施頻度高群であり、4.7%が運動実施頻度低群であった。運動好感度低群においては91.3%が運動実施頻度低群であり、8.7%が運動実施頻度高群であった。運動好感度高群においては85.3%が運動実施頻度高群であり、14.7%が運動実施頻度低群であった。

図3は他の要素における運動好感度の割合を表したものである。無所属群において86.6%が運動好感度高群であり、13.4%が運動好感度低群であった。所属群においては96.2%が運動好感度高群であり、3.8%が運動好感度低群であった。運動実施頻度低群においては61.1%が運

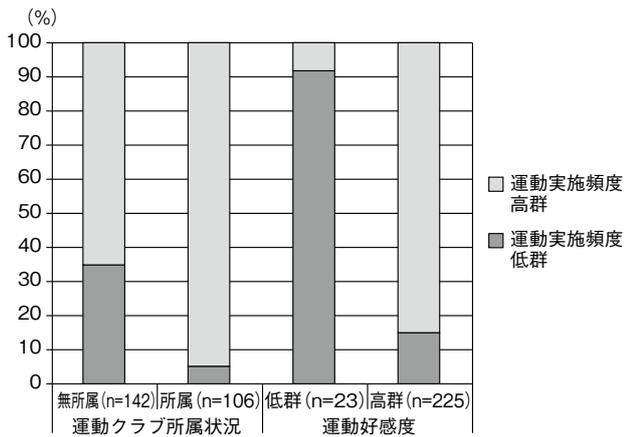


図2 他の要素における運動実施頻度の割合  
図は運動クラブ所属状況、運動好感度における運動実施頻度の割合を百分率で表わしたものである。

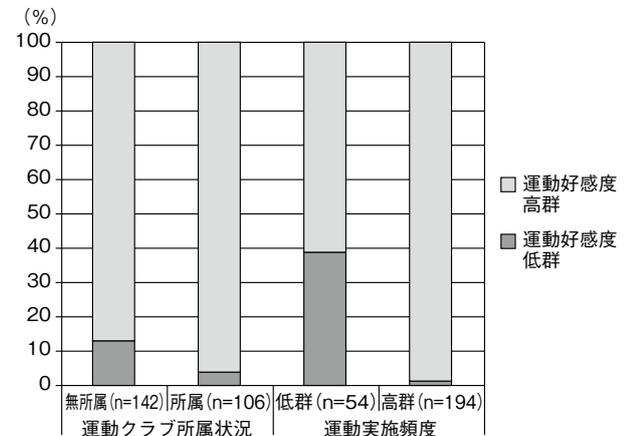


図3 他の要素における運動好感度の割合  
図は運動クラブ所属状況、運動実施頻度における運動好感度の割合を百分率で表わしたものである。

動好感度高群であり、38.9%が運動好感度低群であった。運動実施頻度高群においては99.0%が運動好感度高群であり、1.0%が運動好感度低群であった。

## 2. 運動クラブ所属状況が体育授業への苦手意識に及ぼす影響について

表3は運動クラブ所属状況と体育授業への苦手意識の関係を表したものである。全体でみると所属群と比較して無所属群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」、「劣等感感情」および「嫌悪感情」の値において有意に高い値を示した。

表3 運動クラブ所属状況と苦手意識の関係

		回避感情	比較感情	劣等感感情	嫌悪感情	合計
全体	所属 (n=106)	M 6.59	8.05	9.07	5.15	28.85
		SD 3.66	3.49	4.47	3.13	11.49
	無所属 (n=142)	M 8.04	8.34	10.84	6.10	33.31
		SD 4.33	3.32	4.83	3.43	12.63
	t 値	2.78**	0.67	2.95**	2.24*	2.86**
男子	所属 (n=60)	M 5.87	7.88	8.23	4.77	26.75
		SD 3.18	3.31	4.24	2.86	10.74
	無所属 (n=57)	M 7.72	9.30	10.28	5.84	33.14
		SD 3.89	3.09	4.12	3.13	10.58
	t 値	2.82**	2.39*	2.64*	1.94	3.24**
女子	所属 (n=46)	M 7.52	8.26	10.15	5.65	31.59
		SD 4.05	3.73	4.58	3.41	11.96
	無所属 (n=85)	M 8.25	7.69	11.21	6.27	33.42
		SD 4.62	3.33	5.24	3.62	13.90
	t 値	0.90	0.89	1.15	0.95	0.76
3年生	所属 (n=28)	M 6.04	7.71	8.86	4.93	27.54
		SD 3.45	3.61	4.62	3.27	11.13
	無所属 (n=28)	M 5.96	8.00	9.93	4.68	28.57
		SD 3.27	3.59	4.38	2.50	10.35
	t 値	0.08	0.30	0.89	0.32	0.36
4年生	所属 (n=35)	M 6.97	7.80	9.14	5.06	28.97
		SD 4.22	3.20	4.22	3.09	12.03
	無所属 (n=34)	M 8.18	8.18	11.26	6.00	33.62
		SD 4.49	3.50	5.07	3.52	12.80
	t 値	1.15	0.47	1.89	1.18	1.55
5年生	所属 (n=21)	M 6.76	8.00	10.00	5.76	30.52
		SD 3.56	3.56	5.38	3.49	12.02
	無所属 (n=36)	M 8.14	7.58	10.92	6.00	32.64
		SD 4.32	2.87	4.71	3.00	12.41
	t 値	1.24	0.48	0.67	0.27	0.63
6年生	所属 (n=22)	M 6.50	8.91	8.32	5.00	28.73
		SD 3.17	3.79	3.82	2.78	11.10
	無所属 (n=44)	M 9.16	9.30	11.02	7.16	36.64
		SD 4.48	3.24	5.08	3.91	13.37
	t 値	2.48*	0.43	2.20*	2.31*	2.39*

(\*\*, p < 0.01 \* , p < 0.05)

3年生, 4年生および5年生においては所属群, 無所属群の間では体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」, 「比較感情」, 「劣等感情」および「嫌悪感情」の値に有意な差は認められなかった。一方で, 6年生においては所属群と比較して無所属群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」, 「劣等感情」および「嫌悪感情」の値において有意に高い値を示した。

### 3. 運動実施頻度が体育授業への苦手意識に及ぼす影響について

表4は運動実施頻度と体育授業への苦手意識の関係を表したものである。全体でみると運動実施頻度高群と比較して運動実施頻度低群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」, 「劣等感情」および「嫌悪感情」の値において有意に高い値を示した。

中学年および高学年においては所属群と比較して無所属群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」, 「劣等感情」および「嫌悪感情」の値において有意に高い値を示した。

ところで, 調査対象を運動実施頻度高群と運動実施頻度低群に分類したところ, 性別のn数に大きな差異が生じた。そのため, 特に大きな差異が認められた男子(低

群:n=11, 高群:n=106), 女子(低群:n=88, 高群:n=43)においては検定を行わなかった。

### 4. 運動好感度が体育への苦手意識に及ぼす影響について

表5は運動好感度と体育授業への苦手意識の関係を表したものである。全体でみると運動好感度高群と比較して運動好感度低群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」, 「劣等感情」および「嫌悪感情」の値において有意に高い値を示した。

ところで, 調査対象を運動好感度高群と運動好感度低群に分類したところ, 全体, 性別および学年のn数に大きな差異が生じた。そのため, 特に大きな差異が認められた男子(低群:n=4, 高群:n=113), 女子(低群:n=112, 高群:n=19), 3年生(低群:n=3, 高群:n=53), 4年生(低群:n=19, 高群:n=50), 5年生(低群:n=4, 高群:n=53)および6年生(低群:n=4, 高群:n=58)においては検定を行わなかった。

## 考 察

### 1. 3要素(運動クラブ所属状況, 運動実施頻度および運動好感度)の関係性について

本研究で体育授業への苦手意識に影響を与える要素として推察した3要素, 運動クラブ所属状況, 運動実施頻度および運動好感度の関係性について検討した。図3より所属群と運動実施頻度高群においては運動好感度高群が90%以上を占めており, 無所属群や運動実施頻度低群においてもその値はそれぞれ86.6%, 61.1%を示していた。したがって, 運動に対する好感度は運動クラブ所属状況および運動実施頻度と明確な関連を示していないことが示唆される。

一方, 図2では所属群においては運動実施頻度高群が95.3%を占めていたが, 無所属群においてもその値は65.5%を示していた。加えて, 図1より運動実施頻度高群, 低群の所属群の割合はそれぞれ52.1%, 9.3%であった。この様な結果より, 所属群は運動実施頻度高群が大半を占める傾向にあったが, 運動実施頻度高群においては所属群と無所属群の割合はほぼ均一であり, 運動クラブ所属状況と運動実施頻度は異なる要素として体育授業への苦手意識に影響を及ぼしている可能性が推察された。そのため, 本研究においては運動クラブ所属状況, 運動実施頻度, 運動好感度が体育授業への苦手意識に影響を及ぼすと考え, その影響を検討することとした。

### 2. 運動クラブ所属状況が体育授業への苦手意識に及ぼす影響について

所属群と比較して無所属群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」, 「劣等感情」および「嫌悪感情」の値において有意に高い値を示していた。

表4 運動実施頻度と苦手意識の関係

		回避感情	比較感情	劣等感情	嫌悪感情	合計
全 体	高群	M 6.61	8.12	9.23	5.18	29.14
	(n=194)	SD 3.52	3.40	4.35	3.04	11.17
	低群	M 9.71	7.99	12.08	7.13	36.91
	(n=54)	SD 5.03	3.66	5.43	3.84	14.95
	t値	5.42**	0.27	4.24**	4.13**	4.39**
中 学 年	高群	M 6.16	7.93	8.98	6.16	27.9
	(n=100)	SD 3.52	3.46	4.21	3.52	11.0
	低群	M 9.68	7.92	13.24	9.68	37.6
	(n=25)	SD 4.61	3.37	4.75	4.61	12.0
	t値	4.19**	0.01	4.41**	2.94**	3.91**
高 学 年	高群	M 7.10	8.32	9.50	5.59	30.50
	(n=94)	SD 3.48	3.34	4.50	3.11	11.29
	低群	M 10.83	9.10	13.03	8.17	41.14
	(n=29)	SD 4.96	3.32	5.12	3.83	13.76
	t値	4.54**	1.11	3.58**	3.71**	4.21**

(\*\*;p < 0.01 \*;p < 0.05)

表5 運動好感度と苦手意識の関係

		回避感情	比較感情	劣等感情	嫌悪感情	合計
全 体	高群	M 6.96	8.15	9.76	5.36	30.24
	(n=225)	SD 3.71	3.39	4.60	3.05	11.61
	低群	M 11.83	8.87	13.17	8.96	42.83
	(n=23)	SD 5.22	3.36	5.15	4.15	13.59
	t値	5.74**	0.97	3.35**	5.19**	4.87**

(\*\*;p < 0.01 \*;p < 0.05)

したがって、無所属群は所属群と比較し体育授業への苦手意識を感じやすいと推察される。運動クラブに所属していると一つの種目を専門的に行っていることから、体育授業中にもその種目で自分の能力を発揮する機会が存在する。しかしながら、運動クラブ無所属の児童にはそのような機会がなかなか存在せず、結果として体育授業への苦手意識が形成されている可能性がある。一方、「比較感情」に注目すると有意な差が認められなかった。この結果の要因として、チーム内におけるレギュラー争いなどで自分と他者を比較する機会が運動クラブ所属群には多数存在することが挙げられる。

この様なことより、児童の運動クラブ所属率を向上させることは体育授業への苦手意識改善の対策と考えられる。

男子においては所属群と比較して無所属群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」、「比較感情」および「劣等感感情」の値において有意に高い値を示していた。一方「嫌悪感情」の値に有意な差は認められなかった。したがって、所属群と比較して、無所属群が体育授業への苦手意識と「回避感情」、「比較感情」および「劣等感感情」を感じやすいことが判明した。女子においては無所属群、所属群の間に体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」、「比較感情」、「劣等感感情」および「嫌悪感情」の値に有意な差は認められなかった。したがって、女子における体育授業への苦手意識にスポーツクラブ所属状況は影響を及ぼしていないと推察される。

この様な結果より、運動クラブ所属状況は男子における体育授業への苦手意識に影響を及ぼしていると推察される。そこで、男子における体育指導場面においては運動クラブ所属状況に配慮し、無所属児童に対しては「劣等感感情」を形成しない様に肯定的な言葉かけを多く行うことが重要である。また、「回避感情」「比較感情」が形成されない様にルールや教材に工夫を施し、無所属児童が活躍しやすく、他人と比較せずに活動できる環境を提供するといった対策も考えられる。

3年生、4年生、および5年生においては所属群、無所属群の間では体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」、「比較感情」、「劣等感感情」および「嫌悪感情」の値に有意な差は認められなかった。6年生においては所属群と比較して無所属群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」、「劣等感感情」および「嫌悪感情」の値において有意に高い値を示していた。したがって、6年生においては所属群と比較して無所属群が体育授業への苦手意識と「回避感情」、「劣等感感情」および「嫌悪感情」を感じやすいと考えられる。所属児童は高学年になるにつれ、クラブで行っている運動への技能などが向上し体育活動の中で活躍機会も増加してくる傾向にある。一方で、無所属児童は所属児童と自身を比較してしまい、体育授業に対しての苦手意識を

形成させていくと推察される。この様なことより、指導者は学年の推移を考慮し、特に6年生において無所属群に「回避感情」、「劣等感感情」および「嫌悪感情」が形成されないように指導内容を検討する必要がある。具体的には高学年における体育指導場面では所属児童を中心に技能レベルを一定にした班をいくつか構成し、教え合い活動を軸に単元を構成していくことで、技能レベルに関係なく子どもが楽しめる環境を提供する方法が考えられる。

### 3. 運動実施頻度が体育授業への苦手意識に及ぼす影響について

運動実施頻度高群と比較して運動実施頻度低群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」、「劣等感感情」および「嫌悪感情」の値において有意に高い値を示していた。したがって、運動実施頻度低群は運動実施頻度高群と比較し体育授業への苦手意識を感じやすいと推察される。「体力・運動能力調査」(文部科学省, 2010; 札幌市教育委員会, 2010)により、運動実施頻度が運動好感度や体力といった運動に関わる要素と深い関係性があることが明らかにされている。つまり、運動機会が多い子どもほど体育に対して好意的な印象を持ち、体力などの高さから「回避感情」、「劣等感感情」および「嫌悪感情」を形成しづらい状況にあると考えられる。一方で、「比較感情」に注目すると有意な差が認められなかった。

この様な結果より、体育時間中に他者と自分を比較することは運動実施頻度に関係なくほとんどの児童に認められる行為であり、運動実施頻度高群の子どもは多様な運動機会の中で他者と自分を比較することが慣習化されていると考えられる。したがって、児童の運動実施頻度を向上させることは体育授業への苦手意識改善の対策と考えられる。また、休み時間などに教師が積極的に児童と関わり、学級全体で運動をする時間を確保するという方法も検討されるべきである。

中学年および高学年において運動実施頻度高群と比較して運動実施頻度低群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」、「劣等感感情」および「嫌悪感情」の値において有意に高い値を示していた。したがって、中学年および高学年においては運動実施頻度高群と比較して運動実施頻度低群が体育授業への苦手意識と「回避感情」、「劣等感感情」および「嫌悪感情」を感じやすいと推察される。

この様な結果から、中学年の段階で運動実施頻度が体育授業への苦手意識に影響を及ぼしていることが示唆される。宮崎(1981)によると小学校段階に学校や家庭で様々な運動機会を与えることは、児童の運動機能差の改善に大きな役割を担うとされている。そこで、中学年の頃より授業時間外の運動実施頻度を向上させる指導が検討される。具体的には授業時間の中で児童に多様な教材

を提供し、休み時間や放課後に様々な運動に親しむ基礎を育成するべきである。また、通年で授業導入時に様々な運動を紹介する時間を設け、児童の運動に対する興味関心を引き上げるといった方法も考えられる。

#### 4. 運動好感度が体育への苦手意識に及ぼす影響について

運動好感度高群と比較して運動好感度低群が体育授業への苦手意識の合計と下位尺度である「回避感情」「劣等感情」「嫌悪感情」の値において有意に高い値を示していた。つまり、運動好感度低群は運動好感度高群と比較して体育授業への苦手意識を感じやすいと推察される。「体力・運動能力調査」(文部科学省, 2010; 札幌市教育委員会, 2010), 松尾(2009)や岡澤ほか(2003)の研究より、運動好感度は体力、運動実施時間および運動有能感といった要素とも深い関係性を示している。

この様なことより、運動を好意的に捉えている子どもは体育に対しても「回避感情」「嫌悪感情」を抱きづらく、体育に進んで取り組んでいると考えられる。一方で、運動好感度の低い児童は自分自身の能力に対する自信の無さから劣等感を感じ、体育授業への苦手意識を形成している可能性が示唆される。ところで、「比較感情」の値においては2群間に有意差が認められなかったことから、運動好感度に関わらず、子どもは体育に取り組む際に他者の様子を気にしていると推察される。

したがって、児童の運動好感度を向上させることは体育授業への苦手意識改善の一对策と考えられる。金子(2006)によると、遊びを発展させる用具の開発や児童が想像力を発揮できる単元構成の工夫が運動好感度を向上させるためには重要であるとされている。また、表5や図3からも明らかな様に、児童の運動に対しての好感度は一般的に高い傾向にある。そこで、音楽を使用するなど授業場面の雰囲気作りを心がけることで、運動好感度が高い児童によって雰囲気が活性化され、運動好感度が低い児童も含めて楽しめる環境を提供することができると考えられる。

#### 5. 本研究の限界と課題

本研究では、調査対象者の数が多数とは言えず、運動実施頻度および運動好感度の調査においては比較を行う2群間のn数に大きな差異が生じたことに対しては検討を行わなくてはならない。今後の課題としては縦断的な調査を実施し、体育授業への苦手意識がどのような変化を辿るのかをより詳細に調査を行う必要がある。また、運動クラブ所属状況、運動実施頻度および運動好感度といった要素間の関係性や体育授業への苦手意識と運動クラブ所属状況、運動実施頻度および運動好感度の関係性が明らかになったが、本研究のみでは明確な因果関係を証明することは困難である。そのため、今後の課題として運動クラブ所属状況、運動実施頻度および運動好感度といった要素間の関係性や体育授業への苦手意識と運動

クラブ所属状況、運動実施頻度および運動好感度の関係性に対する詳細な検討を行うべきである。この様な課題を受け、今後は調査対象者の増加、質問項目の追加および追跡調査等を行い、体育授業への苦手意識の研究をさらに発展させていきたい。

#### まとめ

本研究では札幌市内N小学校の児童248名を対象に「体育授業への苦手意識測定尺度」を用い、運動クラブ所属状況、運動実施頻度および運動好感度が体育授業への苦手意識に及ぼす影響を調査した。その結果、以下のような知見を得た。

##### 1. 3要素(運動クラブ所属状況、運動実施頻度および運動好感度)の関係性について

3要素(運動クラブ所属状況、運動実施頻度および運動好感度)間には何らかの関係性が示唆されたが、本研究では異なる要素であると捉えた。

##### 2. 運動クラブ所属状況が体育授業への苦手意識に及ぼす影響について

運動クラブへの所属率を向上させることが体育授業に対しての苦手意識改善に有効である可能性が示唆された。また、体育指導場面においては男子の運動クラブ所属状況差に配慮し、無所属児童に対して肯定的な言葉かけを行うことや高学年の無所属群児童が体育授業に対しての苦手意識を形成しない様に教材・教具に工夫を施し、技能レベルに関係なく子どもが楽しめる環境を提供することが重要である。

##### 3. 運動実施頻度が体育授業への苦手意識に及ぼす影響について

運動実施頻度を向上させることが体育授業に対しての苦手意識改善に有効である可能性が示唆された。また、体育授業に対しての苦手意識を改善するために、休み時間などに教師が主体となり、学級全体での運動時間を確保する方法、授業時間中に多様な教材を提供し、運動に接する経験を増やす方法や通年で授業の導入時に様々な運動を紹介する時間を確保する方法が体育授業外の運動実施頻度を向上のために検討される。

##### 4. 運動好感度が体育授業への苦手意識に及ぼす影響について

運動好感度を向上させることが体育授業への苦手意識改善に有効である可能性が示唆された。また、体育授業への苦手意識を改善するためには学校体育場面において児童が楽しめる様に単元構成に工夫を施すことや音楽等の補助教材を使用して授業場面の雰囲気作りを心がけ、全員で楽しめる環境を提供することが重要である。

文 献

- 藤田勉 (2009) 体育授業における達成目標の接近回避傾向と動機づけの関係. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 19: 61-70.
- 深谷和子・吉野真弓 (1999) 運動の苦手な子の心理と友人関係. モノグラフ・小学生ナウ vol.20-1, <http://all1.g.akamai.net/f/111/143111/15m/benessel.download.akamai.com/143111/j/monographpdf/1/1-vol-20-1.pdf>, (最終参照日2013年4月1日)
- 萩野一美 (1985) 体育嫌いの原因とその指導—私の長い実践体験から—. 高田典衛監, 体育嫌いの子共をどう指導したらよいか (第3版). 明治図書: 東京, pp. 31-34.
- 今林俊一 (1996) にごて意識をもちやすい子. 児童心理, 50: 299-305.
- 伊藤三男・波多野義郎 (1982) 「体育授業嫌い」の生起に関する因果推論の試み. 体育学研究, 27 (3): 239-246.
- 加賀秀雄 (1989) 運動の好きな子, 嫌いな子. 体育科教育, 37 (12): 14-17.
- 上家卓・中道莉央・神林勲・新開谷央・城後豊 (2013) 児童期における体育への苦手意識の構造及び測定尺度に関する研究 (1) —性差, 生年月日の差, 学年差に着目して—. 北海道教育大学紀要教育科学編, 63(2): 259-271.
- 金子優誠 (2006) 運動好きな児童を増やす取り組み—2学年基本の運動とゲームの実践から—. 上越教育大学教育実践研究, 16: 107-112.
- 小林寛道 (2008) 子どもにとってなぜ運動は必要か. 体育の科学, 58 (5): 300-304.
- 日下裕弘・丸山富雄・加納弘二 (2001) 生涯スポーツの理論と実際. 大修館書店: 東京, pp.10-80.
- 松尾晋典・若林紀乃・大原美香・伊藤美香・時津啓・長沼貴美 (2009) 児童の生活状況からみた体力と運動意識の関連—島嶼部の小学生に着目して—. 広島文化学園大学社会情報学研究, 15: 23-31.
- 宮下充正 (2010) 子どものときの運動が一生の身体を作る. 明和出版: 東京.
- 宮崎義憲 (1981) 運動遅滞児の体育指導. 体育科教育, 11: 45-47.
- 文部科学省 (2008) 平成20年度小学校学習指導要領解説 体育編 (第4版). 東洋館出版社: 東京, pp.4-10.
- 文部科学省 (2011) スポーツ基本法, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm), (参照日2013年2月4日)
- 文部科学省 (2003) 中央教育審議会平成15年度子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申), [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/)
- chukyo0/toushin/021001a.htm, (参照日2013年2月4日)
- 文部科学省 (2010) 平成22年度体力・運動能力調査結果. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k\\_detail/1311808.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1311808.htm), (参照日2013年2月5日)
- 並木孝樹 (2008) できない子ができる事実をつくりだす—苦手意識へのいちばんの対応—. 児童心理, 10: 46-50.
- 新原昇・渡辺正彦 (1985) 体育嫌いをなくすには授業で何が必要か. 高田典衛監, 体育嫌いの子共をどう指導したらよいか (第3版). 明治図書: 東京, pp.21-24.
- 及川研・小川正代 (1999) 運動への意識や意向. モノグラフ・小学生ナウ vol.20-1, <http://all1.g.akamai.net/f/111/143111/15m/benessel.download.akamai.com/143111/j/monographpdf/1/1-vol-20-1.pdf>, (最終参照日2013年4月1日)
- 岡澤祥訓 (2003) 運動好きと自己有能感. 体育の科学, 53(12): 905-909.
- 札幌市教育委員会 (2010) 平成21年度札幌市子どもの体力向上支援委員会報告書平成20年度札幌市体力・運動能力, 運動習慣調査結果.
- 高田典衛 (1985a) 「楽しい体育」の実践を支えるもの—横内小学校の体育を見つけて—高田典衛監, 楽しい体育の授業づくり (第3版). 明治図書: 東京, pp.6-7.
- 高田典衛 (1985b) 体育嫌いの子共をどう指導したらよいか (第3版). 明治図書: 東京, pp.9-20.
- 高橋建夫 (1999) 体育嫌いが生み出されるメカニズム—技能下位児の学習行動に着目して—. 体育科教育, 10: 16-19.
- 立木正・新開谷央・菊幸一 (2009) 小学校体育科授業研究 (第3版). 教育出版: 東京, p.36.
- 海野勇三 (2002) 体育の授業における「評価のまなざし」とその教育力. 楽しい体育・スポーツ誌, 141 (3): 22-25.
- 吉岩巨之 (1985) 体育嫌いが生じる実態を教師はどうみつめるか. 高田典衛監, 体育嫌いの子共をどう指導したらよいか (第3版). 明治図書: 東京, pp.26-29.

〔平成25年4月17日 受付〕  
〔平成25年7月18日 受理〕